

を前提とするもので、現在支那の雜然たる貨幣の價值單位は銀兩及洋元の二元的になつてゐる故に、記帳單位の研究を以て支那會計學の根本問題と名付け、目下の支那貨幣の状態より考究すれば記帳單位は洋元が適當で、しかも一般に通用の洋元を以て貨幣の單位とすべきを論じて居る。輓近支那に於ける疑古派並びに正統派の思想に就いては其代表的人物たる康有爲譚嗣同及び章炳麟の思想を解剖し、上海の一考察は一切の罪惡の滋生するコスモポリタンの都市上海を舞臺として社會惡に就いての見解である。最後の華語與漢字的聲音變遷は之を二分し一は從前的研究とし更に之を時間上の變遷、空間的變遷に分ち、一は現在の考證で之を唇音、牙喉音、舌齒音、貫通諸部の四に分類して論じたものである。以上八篇古今多方面に互るが意義ある力作が多く、躍動する支那と特に密接の關係に立つ同文書院の記念出版として、眞に適當の出版と云へやう。(菊判、六八〇頁、同文書院支那研究部發行、上海北四川路底内山書店賣捌)(以上今石)

● ルネツサンス史概説

文學博士 坂口 昂著

本書は西洋史上、ルネツサンス・プロローバも稱すべき伊太利ルネツサンスに就いての概説であつて、著者の最後の研究發表、言はゞその墓標である。本書に於て著者がルネツサンスに向けた觀察の焦點は、凡そ二つあると言へやう。古典學藝と云ふ文化種子が、十四、五世紀に至つて、突如萌芽し、生長し、花咲いて所謂ルネツサンスになつたのでなくて、通常暗黒時代と言はれてゐる約一千年に互る中古期の歴史的發展の中に、その文化種子の發芽生長すべき土壤が用意されたのである、こいふこみがその第一焦點であり、而して、一旦萌芽した古典學藝及其の精神が、如何に近代的に生長し、花咲き、實を結んだか、こいふのが第二の焦點となつてゐる。全篇六章、その前二章が第一焦點に、後四章が第二の焦點に合するものと観られる。

著者は單に學藝についてのみならず、政治、經濟等にも

論及し、以てそれ等一般文化事象の關聯的發展の中に、ルネッサンスの歴史的進展を把握せんとしてゐる。そしてその目的は或程度迄達せられてゐる。がもし強ひて遺憾に思はれる點を指摘するならば、本書の原稿が限られた僅かな時間内の講演のそのためであらうか、各文化事象の歴史的關聯、及それ等の事象ミルネッサンス精神との意味的結合が十全には論及されてゐないことこれである。特にルネッサンスの精華とも云ふべき繪畫、彫刻に就いては一層その感を深くする。併しながら、もし讀者にしてそこに挿入された多くの挿繪を凝視熟讀するならば、その繪によつて、無言の而も充分なる説明を觀取し得るであらう。

こまれば本書は「榮えゆく人生が、精神及び藝術の生活に於て、いや高まり、いや廣く廣まり行く傾向を有する限り、それが凡てルネッサンスの發生である」こいふ著者獨特の史觀によつて貫ぬかれてゐる所の、伊太利ルネッサンスの綜觀史であつて、伊太利ルネッサンスの眞髓を直ちに把握せんとする者には教ゆる所大であらう。(菊

判二四二頁、價三、〇〇圓、東京岩波書店發行)(井上)

●西洋近世史講話

齋藤清太郎著

西洋史上、中世と近世とを分つべき點は二三に止まらない。たゞへば中世は一方に封建的割據主義が行はれると共に他方、皇帝或は法皇による世界的統治が企てられたに對し、近世にはこの二傾向とも影をうすめ中央集權的國家の發達を見、同時に是等諸國家の國民的對抗が甚しくなつた。而して學藝復興以來深められた個人の自覺は獨り學藝方面にて見られたのみでなく信仰界に於ても加特力の統一主義よりの解放を主張して宗教改革が生じた。種々抗爭の後、基督教徒を新舊の兩派に分たしめた。更に新大陸の發見により歐洲人の活動範圍が擴大されて大西洋時代の出現し來る事も注目すべき近世的特徴である。本書はかゝる特徴を有する西洋近世史を政治史を中軸として述べられたもので、如上の諸特徴を各方面に看取し得べき、宗教改革より米國獨立に至る迄の約三百年間を含んで居る。格別に新しさを求めず着實に各國內及び國